

佳作

ありがとうより、もっとありがとう

福岡県
明治学園小学校 四年

天埜 優奈

私の父は単身赴任で四国の高松にいます。でも、幼稚園や小学校の行事、家族のイベントには必ず帰ってきてくれ、私にさみしさを感じさせないように、仕事で忙しい中、いつもかけつけてくれます。

そんな父の体の変化に気づいたのは、私が八歳の頃でした。会うと必ず、日本の歴史や偉人の話などをわかりやすく話してくれてた父が、あまりしゃべらなくなり、すぐに疲れるようになりました。そんな日が続き、しばらくすると、父の顔を見るのが少なくなりました。

私、知りませんでした。

小学校に入学した頃から、父が重い肝臓の病気にかかっていたことを。

私、気付きませんでした。

特別な注射と強い薬の副作用で、体だけでなく、精神にまでダメージを受け、入院をくり返していた事を。

病気を私に内緒にしておこうと言いつ出したのは父だった、という事を母から聞きました。それは、小学校に入学したばかりの、夢や希望に満ちあふれ、父を信じ母を信じ頑張ってきている私に、余計な心配で悲しませたくない、強い父の姿しか知らない娘に弱い姿を見せてしまうと娘までが自信のない

不安な日々を送らなければならなくなる、その方がつらいと言ったそうです。

私は泣きました。私の事をこんなにも大切に思ってくれる父へ、感謝の涙を流しました。そして、単身赴任で高松だと思っていた父が、まさか入院していたなんて、小指の先ほども疑わずにいられたのは、母が、いつでも、どんな時でも笑顔をやさず、これまで通り、何も変わらずに、仕事・子育て・家事・看病と頑張ってくれていたからだど気づき、ちよつとした事でふくれたり、何でもない事で文句を言ったりした自分を思い出すと、くやくして、また涙が出ました。

今でも父の病気は完治していませんが、心配するほどの悪いウイルスはいなくなり、少しづつ良くなってきています。

私を大切に思い、自分の病気をかくして私に強さを教えてくれた父と、いつもニコニコ笑顔で私を安心させてくれる優しい母を、ほこりに思います。そして、そんな両親の子供である事がうれしくて、

「お父さん」

「お母さん」

ありがとう、ううん、

ありがとうより、もっとありがとう。